

第4章 エコツーリズム支援のための整備基本計画

第4章 エコツーリズム推進のための整備基本計画

4-1 エコツーリズムを推進するための施設整備の考え方

①ハード面とソフト面の連携

エコツーリズムの推進にあたってはハード面とソフト面の連携が重要となるため、両者の関係性を良く考慮した上で施設整備を実施しなければならない。ハード面だけに特化した場合には、整備した施設が十分に機能を発揮できないことだけでなく、利便性を向上させるだけの施設になる恐れがあり、かえって自然環境に悪影響を与えることも考えられる。また、一度整備を入れた場合には、その後の永続的な維持管理が必要となることも重要な要素となる。このことから、エコツーリズムの推進にあたってはソフト面の対策を優先的に実施し、ハード面（施設整備）にあたっては慎重に導入を検討しなければならない。

一方、利用者からみると、エコツーリズムの最大の資源は自然環境資源をはじめとする既に存在する資源や文化であり、整備された施設そのものに魅力を感じていることは少ない。しかしながら、単にエコツーリズムの資源が「むき出し」で存在しても、一般の利用者にとって魅力的な資源になり得ないことも往々にしてあることから、資源の魅力に気づくためのきっかけとして施設整備が必要となることも有り得る。言い換えると、エコツーリズムにおける施設整備は上記の資源を利用者に効果的に提供する媒介機能であると考えられる。

②大雪山国立公園におけるエコツーリズムのPR

エコツーリズムは地域の条件によって様々な形態が存在（※環境省ではエコツーリズムを3類型に分類）していることから、関係者でさえも概念の共有が非常に困難な実態である。そのため利用者（旅行者）に明確なエコツーリズムのイメージを伝えることができず推進が進まない事例が多い状況である。事実、平成21年に環境省で実施したエコツーリズムの認知度調査（「平成21年度環境にやさしいライフスタイル調査」）ではエコツーリズムの意味を知っている人はわずか21.5%であり、多くの国民にとって身近なものではないと考えられる。

このため、大雪山国立公園においてエコツーリズムを推進するにあたっては、大雪山国立公園をフィールドにしたエコツーリズムの概念を関係者で検討・共有した上で、利用者にわかりやすくかつ効果的な広報手段でエコツーリズムをPRしていく必要がある。このため、多くの利用者が立ち寄る場所にエコツーリズム概念や各種情報を広くPRするための案内機能を有した施設を設置する必要がある。

以上のことから、今回、エコツーリズムを推進する上での施設整備の基本的な考え方を次頁のとおり整理した。

○エコツーリズムを推進するための施設整備（ハード面）の基本的な考え方

- エコツーリズムの推進はソフト面による取り組みを優先する。ただし、ソフト展開では対応ができない点、もしくはソフト展開を行うにあたり必要となった事項については施設整備（ハード面）を導入する
- 施設整備（ハード面）の導入にあたってはソフト面（人材や維持管理体制）との連携が確立されている（あるいは見込まれる）ことを条件とする
- 整備した施設はエコツーリズムの資源を効果的に提供するために必要な機能を有する、あるいは自然環境資源をはじめとするエコツーリズム資源自体を保全するものとする
- エコツーリズムを効果的にPRしていくために案内機能を有した施設を導入する

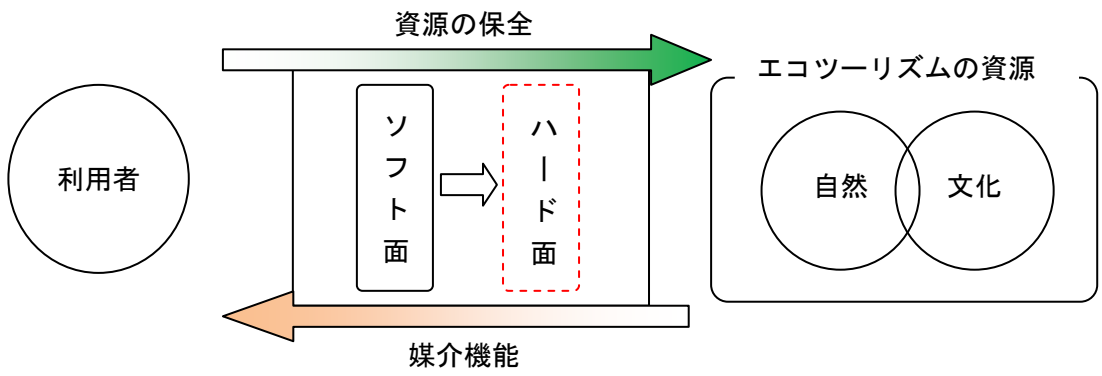


図 4-1-1 エコツーリズムを推進するための方法（施設設備の考え方） 概念図

4-2 環境省の取り組み（直轄整備等）に関する基本的な考え方

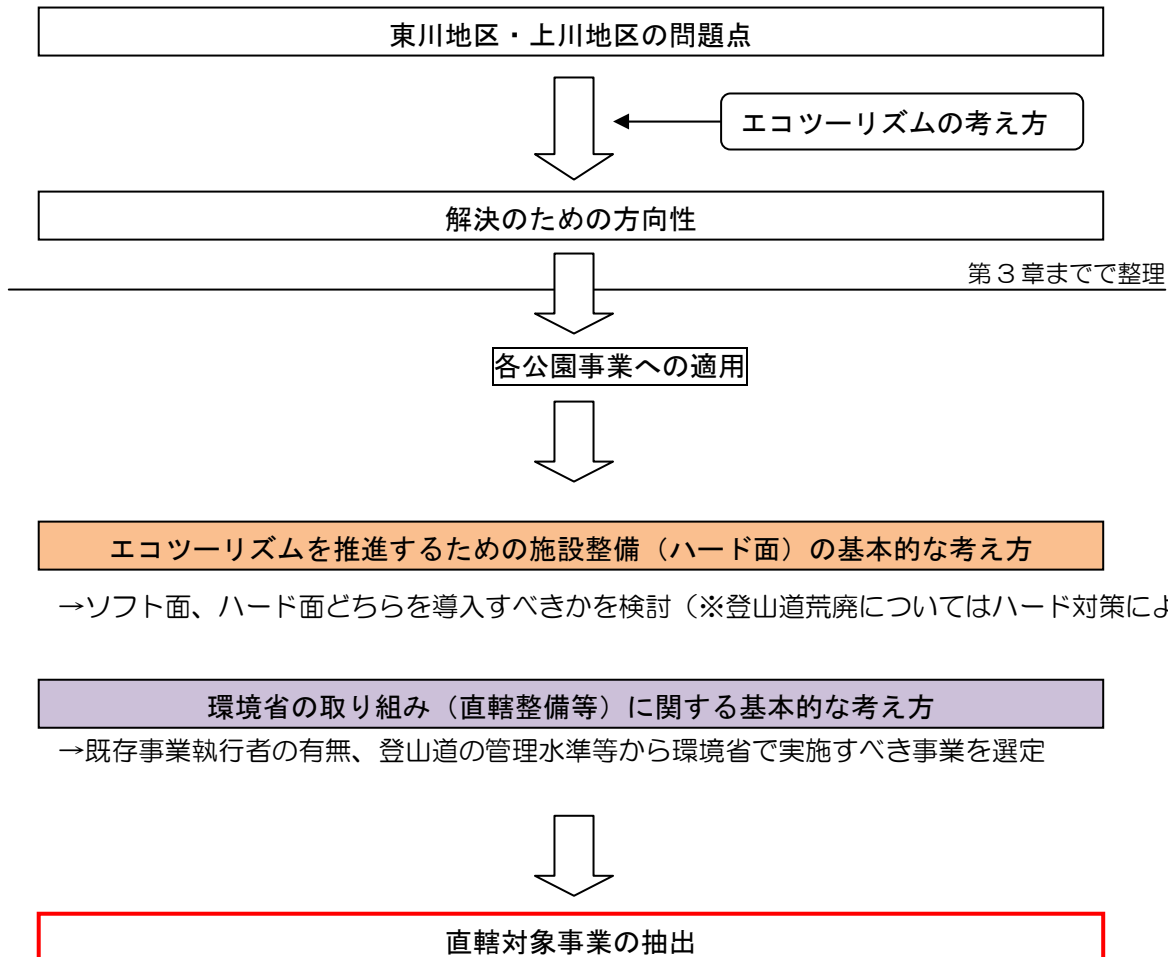
4-1 でエコツーリズムを推進するための施設整備の考え方を整理したところであるが、さらに環境省において当面実施すべき取り組み（直轄整備等）を検討するための基本的な考え方を以下のとおり整理した。

○環境省の取り組み（直轄整備等）に関する基本的な考え方

- 山岳地域の自然環境資源の荒廃（登山道の荒廃等）に関しては、環境省が保全対策等に取り組む。
なお具体的な箇所は現時点での評価指標である登山道管理水準（B-I）について優先的に保全対策を進める
- 大雪山国立公園の利用拠点である集団施設地区は一定以上の利用者がいることからエコツーリズムを推進していく（広く周知していく）拠点とする
- 現状、ソフト面では対応ができず施設整備（ハード面）が必要なもののうち、直轄整備要件を満たし、かつ大雪山国立公園におけるエコツーリズム推進に大きく寄与するものを優先的に行う
- 既存事業施設については、既存事業執行者と連携・協力することでエコツーリズムの推進を図る

4-3 直轄対象事業の整理

4-1 で整理したエコツーリズムを推進するための施設整備（ハード面）の基本的な考え方と 4-2 で整理した環境省の取組み（直轄整備等）に関する基本的な考え方から、大雪山国立公園の公園事業のうちエコツーリズムを推進していくにあたり環境省が取り組むべき事項（直轄整備等）を以下の手順で整理した。



次頁より、東川地区、上川地区、登山道について上記による直轄対象事業の抽出を実施した。

なお、登山道については現地の荒廃状況と登山道の管理水準との間に相違がある箇所が数箇所確認された。このような箇所については、今後注意深く経過をモニタリングしていくこととし、当面の登山道荒廃に関する対策については、登山道の管理水準と現地の荒廃状況が一致する箇所について保全対策を進めていくこととする。

表 4-3-1 上川地区において当面実施すべき環境省の取組み(直轄整備等)

公園計画(集団施設地区)	エコツーリズム推進に向けた役割	今後の方向性	エコツーリズムを推進するための方法(施設整備の基本的考え方)						環境省が実施すべき施設整備の抽出			環境省直轄による施設整備の導入	
			ソフト対応	ハード対応	人材(ガイド等)			取り組み(例)	既事業執行者(管理者)	直轄整備要件	大雪山エコツーリズム推進への寄与		
					維持管理体制	資源保全性・提供性							
層雲峡集団施設地区	園地	層雲峡温泉街からも近く、また周辺森林での自然観察なども楽しめる。上川側でのガイドの参入等のエコツーリズム導入の下地が整った場合には手軽なエコツアー散策ルートの一つとして活用が期待される。	○	△	×	○	○	・自然観察会や講習会の実施 ・園地有効活用に必要な再整備 ・層雲峡中心部における誘導標の整備や散策マップの作成・配布	環境省	○	中	△	園地の再整備(WC改修/標識等整備)
	博物展示施設	上川地区側の拠点施設として、層雲峡の成り立ちや大雪山国立公園の自然をわかりやすく紹介し、黒岳の最新の気象情報なども発信している。立地も良く、利用者も多いことから、今後、上川側でのガイドの参入等のエコツーリズム導入の下地が整った場合には推進の拠点と位置付ける。	○	/	/	/	/	・パークボランティアなどの活動拠点として活用 ・自然保護教育活動の拠点施設として、自然観察会などの充実 ・パンフレットや展示の多言語化(実施済)	環境省	/	/	-	-
	野営場	層雲峡温泉街からも比較的近く、層雲峡のピーク時に低料金を滞在できる野営場。周辺の森の環境もよく、また基本的な施設も整備されている。今後、上川側でのガイドの参入等のエコツーリズム導入の下地が整った場合には積極的な活用が考えられる。	○	/	/	/	/	・サマースクールなどのイベントでの積極的な活用 ・インターネット等の情報発信	北海道	/	/	-	-
	駐車場	層雲峡側の拠点となる地区に整備されている施設であり、登山などで終日もしくは数日間、車を駐車する利用者にとって重要な役割を果たしている。	-	/	/	/	/	・既存施設の維持	環境省 上川町	/	/	-	-
銀河流星の滝	園地	層雲峡観光での団体ツアーの目的地として組み込まれることが多く、利用者の多い施設。今後、上川側でのガイドの参入等のエコツーリズム導入の下地が整った場合には、滝という魅力ある自然資源を活かし、新しい利用方法を検討することで、エコツアー利用者の呼び込みが可能となる	○	/	/	/	/	・滝の上部など今までは違う視点から滝を眺める等資源の発掘 ・滝の眺望を遮る枝葉の刈り払い	北海道 上川町 上川中部 森林管理署	/	/	-	-
高原温泉	(ヒグマ情報センター)	現在、沼めぐりルートのゲート機能及び利用者へのレクチャー、巡視が主な機能となっている。今後、展示内容の更新、見せ方の工夫、体制の充実を図ることにより、本エリアにおけるエコツーリズムの拠点として活用できると考えられる。	○	/	/	/	/	・ガイド機能や管理体制の強化による1周コースの常時利用 ・ヒグマの生態に関する情報提供の強化	(環境省) (北海道) (上川町)	/	/	-	-

表 4-3-2 東川地区において当面実施すべき環境省の取組み(直轄整備等)

公園計画(集団施設地区)	エコツーリズム推進に向けた役割	今後の方向性	エコツーリズムを推進するための方法(施設整備の基本的考え方)					環境省が実施すべき施設整備の抽出			環境省直轄による施設整備の導入			
			ソフト対応	ハード対応	人材(ガイド等)	維持管理体制	資源保全性・提供性	取り組み(例)	既事業執行者(管理者)	直轄整備要件			大雪山エコツーリズム推進への寄与	
勇駒別集团施設地区	園地	山麓エリアの自然を手軽に楽しむことのできる園地。また、ロープウェイ施設より山岳エリアにもアクセスできるため利用者も多い。このため、エコツーリズムの情報を総合的に提供する拠点箇所(案内所)としての積極的活用が期待される。	・利用ルール等の周知徹底 ・エコツーリズムに関する情報の集約/提供/PR ・利用者特性に合わせた情報発信 ・エコツアーの提供	○	○	○	△	○	・利用動向に応じたルールや対策の検討と周知 ・エコツーリズム拠点施設(案内所)における情報集約/提供/PR ・質の高いエコツアーの提供	環境省 北海道	○	大	○	園地付帯案内所の整備
	駐車場	旭岳温泉側の拠点となる地区に整備されている施設であり、今後エコツーリズムの推進にあたってもツアーリストに対して有用な施設となる。	・既存施設の維持	-	/	/	/	/	・既存施設の維持	北海道	/	/	/	-
	博物展示施設	旭岳周辺の自然環境・施設情報を提供する場として重要な役割を果たす施設であるが、展示内容の老朽化、立地条件等の理由により、利用者が少なく十分に活用されていない。当該地区においてはエコツーリズムを推進していく拠点施設(エコツーリズム全般の情報発信等機能)が求められており、同機能を有する新規施設との連携を図っていくことが考えられる。	・利用者特性に合わせた情報発信 ・情報の共有化と発信できる体制の検討	○	/	/	/	/	・エコツーリズム拠点施設との連携による情報発信	北海道	/	/	/	-
姿見の池	園地	ロープウェイ姿見駅から姿見の池や夫婦池などを巡る周回歩道と展望台が整備されている。手軽に大雪山の魅力に触れることができ、眺望もよいので利用者数が多いことから旭岳方面でのエコツアーの中心的役割を果たす。	・自然環境資源の資質の保全 ・利用ルール等の周知徹底 ・エコツアーの提供	○	/	/	/	/	・外来種の除去や荒廃した登山道箇所の整備 ・老朽化した標識類の再整備 ・質の高いエコツアーの実施	北海道	/	/	/	-
姿見の池	避難小屋	ロープウェイで手軽に利用できることから、軽装での利用者も多く、急変しやすい山の天候に備えた緊急避難場所はエコツーリズムを推進する上で必要な施設となる。	・既存施設の維持	-	/	/	/	/	・既存施設の維持	北海道	/	/	/	-
天人峡	園地	道内一の落差の滝は魅力のある自然資源であることから、天人峡地区でのエコツーリズムを進める上で、新たなエコツアーメニューの実施などで積極的に活用できると考えられる。	・エコツアーの提供 ・自然環境資源へのアクセス確保	○	/	/	/	/	・敷島の滝上流部の散策ツアー等 質の高いエコツアーの実施	北海道	/	/	/	-

表 4-3-3 登山道において当面実施すべき環境省の取組み(直轄整備等)

公園計画		エコツーリズム推進に向けた役割	既事業執行者 (管理者)	登山道管理水準	環境省直轄による 施設整備の導入	
層雲峡勇駒別線	道路(歩道)	当該路線は大雪山系の中でも主要かつ利用者が最も多い路線の一つであり、山岳地域でのエコツーリズムを推進していく上でも重要な路線であることから、適正な利用のための保全整備が必要となる。	環境省 北海道	中岳分岐～間宮岳(B-I) その他(B-II)	-	※荒廃箇所 [○] の保全修復(H23～実施)
紅葉谷線	道路(歩道)	自然環境資源が豊富であり、層雲峡温泉街からも近く、案内板等の設置も行われたことから、今後、エコツアーのルートなどとして積極的な活用が期待される。	上川町	全線(C-III)	-	-
愛山溪北鎮岳線	道路(歩道)	当該路線は愛山溪温泉～北鎮岳に続く路線である。愛山溪温泉までのアクセス性も比較的良好なことある程度利用は多い路線である。	環境省 北海道	愛山溪温泉～沼ノ平分岐(B-I) 沼ノ平分岐～北鎮岳(B-III)	-	※荒廃箇所 [○] の保全修復(H22～H23実施)
沼ノ平姿見の池線	道路(歩道)	当該路線の裾合平～姿見の池の間は、姿見の池からのアクセスも良く、植物探勝のコースとして利用者が多いことから、エコツアーでの活用が期待される。	環境省	全線(B-I)	-	※荒廃箇所 [○] の保全修復(H17～H19実施)
中岳裾合平線	道路(歩道)	当該路線は旭岳、高山植物群落、池塘、中岳温泉など、山岳から裾野まで興味地点が数多い日帰り周回ルートであり、エコツアーでのメインルートとしての活用が期待される。	北海道	全線(B-I)	○	・荒廃箇所 [○] の保全修復
銀泉台白雲岳線	道路(歩道)	当該路線は高山植物探勝ができる花園が複数あり、利用者の多い路線である。また、お鉢平や高原温泉にも近く、様々なルート設定が可能であることから、エコツアーでの活用が期待される。	北海道	全線(A-II)	-	-
高原温泉高根ヶ原線	道路(歩道)	高原温泉から高原沼を周回する約7kmのコースと、高根ヶ原への登山道(三笠新道)が整備されている。ヒグマの出没が多いため、通常は高原沼までの折返し(半周)コースしか利用できず、紅葉のピーク時のみ1周コースの利用が可能。また、三笠新道もヒグマの出没が多いため、現在閉鎖中。利用者数がピークとなる紅葉時期はシャトルバスが運行し、一般車両の立入は規制される。大雪山国立公園の核心部であり、ヒグマとの共存を図りつつ利用を推進する意味ではエコツーリズムのフィールドとして魅力的な役割を果たすことが期待される。	北海道	全線(B-I)	- ※	-
天人峡勇駒別線	道路(歩道)	当該路線は、ひょうたん池、巨木等の自然環境資源を有する軽登山道であり、老朽化した木道箇所以外は危険箇所も少ないことから、積極的に周知を行うことで利用者の増加が期待できる。また、旭岳温泉と天人峡温泉をつなぐルートであることから、利用の促進が両地区の活性化につながる可能性も期待できる。	北海道	全線(B-II)	-	-
羽衣敷島の滝線	道路(歩道)	敷島橋～敷島の滝間は忠別川沿いの岩場を通るコースであり、羽衣の滝周辺とは異なる雰囲気を持つ歩道である。また、敷島の滝の上流部は自然環境が特に優れていることから、新たな資源の発掘を行うことにより、天人峡内におけるエコツアー促進が期待される。	北海道	全線(C-III)	-	-
全線共通		大雪山国立公園の奥深さと雄大さを実感できる縦走エコツアーや多様な登山道ルートによるエコツアー商品の開発が期待される。	関係行政機関		○	・携帯トイレの仕組み検討 ・登山道標識の統一化 ・登山道モニタリング

【直轄対象事業の抽出結果】

表 4-3-4 エコツーリズム推進のための直轄事業抽出結果

事業名	概要	事業規模
勇駒別園地	案内所の整備 (エコツーリズムセンター)	約 250 m ² ※4-4 拠点施設の検討による
中岳裾合平線歩道	登山道保全修復	約 700m
層雲峡園地	トイレ改修/園地再整備	トイレ 1 棟、園地 1 式
その他	登山道標識の統一化検討	
	トイレの仕組み検討 (携帯トイレ等)	
	登山道荒廃の経過観察 (モニタリング)	

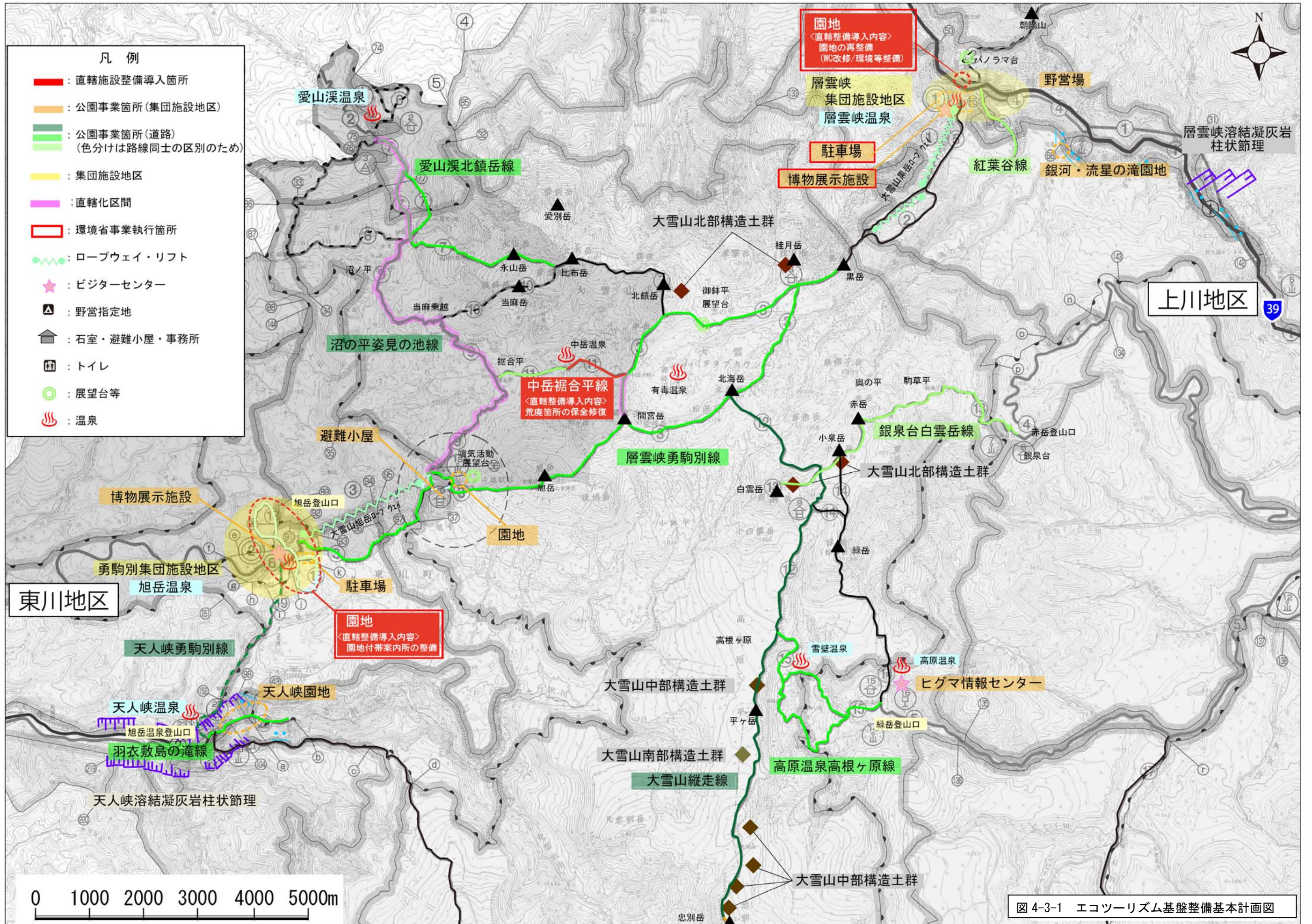
※上川地区では現状において上川地区在住のガイドが存在しない。将来的にガイドが参入しエコツアーが実施される基盤が整った場合に備え既直轄園地の適正な利用と管理を推進していく。

※一方で東川地区においては、既存のガイド事業者がいることや勇駒別集団施設地区の集客性も考慮し、拠点施設を勇駒別地区に配置する。

※その他の「登山道標識の統一化検討」「トイレの仕組み検討 (携帯トイレ等)」については、過去に検討が実施されているが、現状では具体的な動きにはなっていない。今後、関係機関と調整を図りつつ、継続課題として検討を進めていく。

※エコツーリズムのルールづくりや人材育成、その他各種情報の収集・整理などエコツーリズム全体構想に準ずるものを地域で作成する場合には、環境省も積極的に参画する。また、交付事業等必要な財政上の措置を検討する。

※高原温泉高根ヶ原線は登山道の管理水準ではB-Iとなっているが、当該歩道周辺はヒグマの生息密度が高く利用のあり方や関係者による管理体制について今後継続的な関係者による検討が必要なことから、今回事業の抽出からは対象外とした。



4-4 拠点施設の検討

4-3 において直轄対象事業として抽出した、エコツーリズム推進の支援施設として整備が予定される拠点施設（以降：エコツーリズムセンター）に関する各種検討を行う。

(1) 基本方針

エコツーリズムセンターはエコツーリズムに関する各種情報を人を通じて利用者に伝えることを主たる機能とし、エコツーリズムセンターの基本方針を以下のとおり設定する。

- エコツーリズムセンターは大雪山国立公園において「より質の高い自然体験」「自然環境の永続的な保全」「地域活性化」を推進していく観点からエコツーリズムに関する幅広い情報提供や活動を支援していくための施設として整備を実施するものである。
- 大雪山国立公園におけるエコツーリズム推進の拠点場所は既に多くのガイドが参入しエコツーリズムの推進の下地がある程度揃っている東川地区とする。

(2) 配慮事項

エコツーリズムセンターの整備にあたり、以下の事項に配慮するものとする。

- 整備に係る環境への負荷をできるだけ避けること
- 利用者の動線を考慮した、利用しやすい位置に整備すること
- 周辺景観と調和のとれたものとする

(3) 公園事業及び機能上の整理

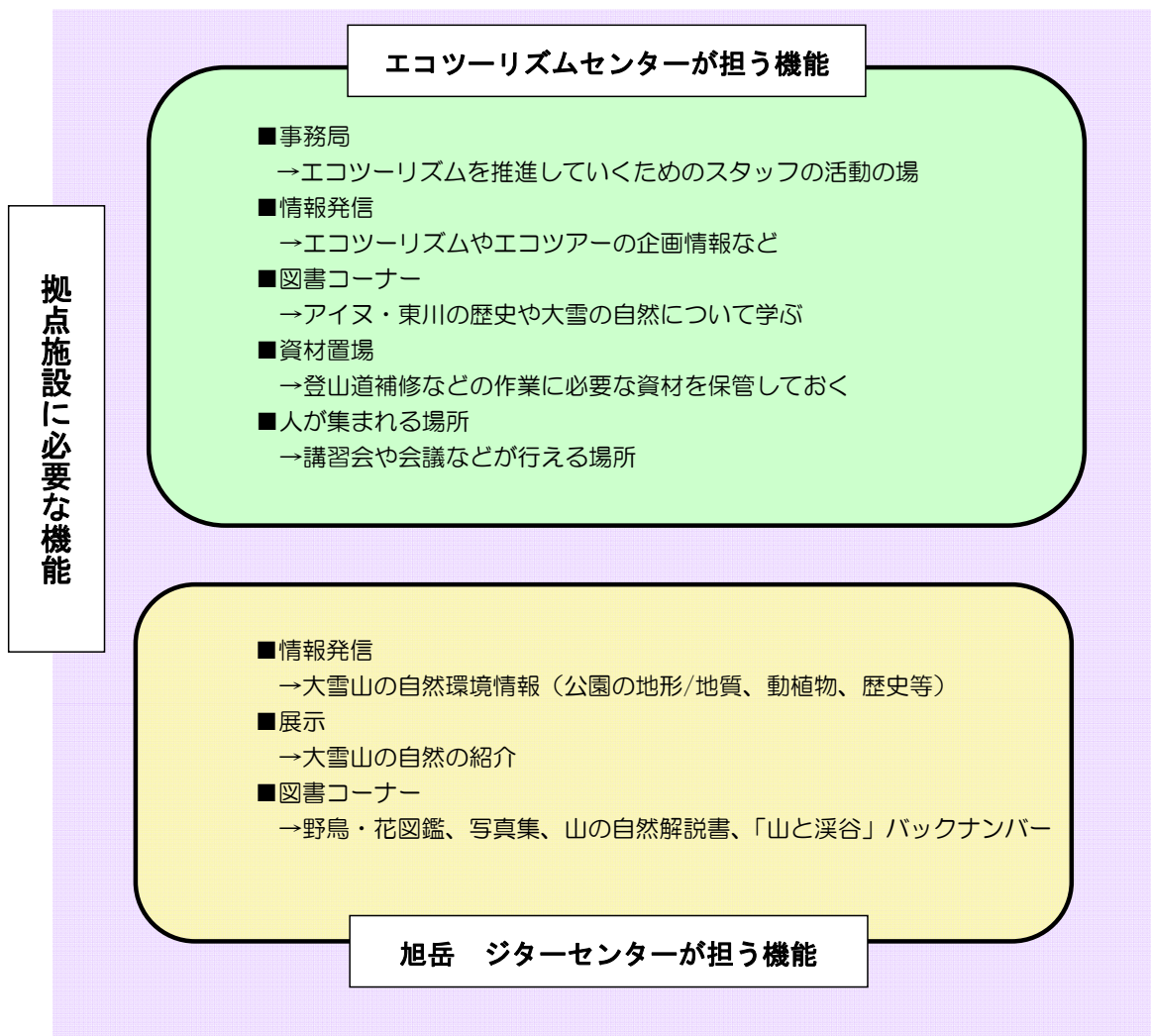
新規エコツーリズムセンターは、エコツーリズムに関する各種情報を利用者へ伝達する機能（案内機能）を主たる機能とすることから、園地付帯の「案内所」として整備を実施する。勇駒別集団施設に既にある旭岳ビジターセンター（博物展示施設）との公園事業上及び機能の整理を表4-4-1及び表4-4-2に示す。

表 4-4-1 公園事業上の整理

施設名	公園事業上の位置付け	定義
エコツーリズムセンター	案内所	公園利用者の利用コース、興味対象等について教示案内するために設けられる施設（案内所及びこれに併設される解説員研修施設等の建築物をもつもの。）
旭岳ビジターセンター	博物展示施設	主としてその公園の地形、地質、動物、植物、歴史等に関し、公園利用者が容易に理解できるよう、解説活動及び模型、写真、図面等の展示施設を用いた展示を行うために設けられる施設

表 4-4-2 機能の整理

施設名	機能	内容
エコツアーリズム センター	事務局	エコツアーリズムの推進の中心となるスタッフの日常職務等を行う活動の場とする
	情報発信	エコツアーリズムやエコツアーの企画情報などを、センターを訪れる利用者及びインターネット上などで発信する
	図書コーナー	アイヌ・東川の歴史や大雪の自然などについての情報を得る場所
	人が集まれる場所	登山道補修の技術講習会や保全活動に興味を持つ利用者の交流、会議を行うことができる場所
	資材置場	保全活動などの作業に必要な資材を保管しておく
旭岳ビジター センター	情報発信	大雪山の自然環境情報（公園の地形/地質、動植物、歴史等）を発信する
	展示	大雪山国立公園の自然情報を常設展示
	図書コーナー	野鳥・花図鑑、写真集、山の自然解説書、「山と溪谷」バックナンバー



(4) 利用対象者と利用方法

想定される利用者をエコツアー参加者とそれ以外の利用者で分類し、対象者ごとに利用方法を想定した。また、エコツアー参加者は旅行行程や目的により更に③タイプに分類した。

【エコツアー参加者と想定される利用方法】

● 出発前目的地確定型：パッケージツアーによる大人数の団体利用

⇒旅行会社が企画する登山ツアー等の参加者を想定。環境保全の観点からフィールドを利用する際にルールやマナーを学ぶ。

● 出発前目的地不確定型：パッケージツアー以外の少人数による利用

⇒時間的余裕のある、自由度の高い旅行者を想定。利用者の自由時間や要望に沿った形のエコツアーの情報を収集して参加する。

● 出発前目的地確定型：パッケージツアー以外の少人数による利用

⇒事前に情報を入手し、個別に旅行行程や目的を設定している旅行者を想定。既にエコツアーへの参加予約を済ませていることも考えられることから、エコツアー開始前にエコツアーリズムセンターに立ち寄り、必要なレクチャーを受ける。

【エコツアー以外の利用者と想定される利用方法】

●登山者

⇒登山前の情報収集や他の登山者との交流、保全技術を習得の場とする。

●山岳観光者

⇒情報の収集や学習の場、休息などに利用する。また、ロープウェイ運休時の代替アクティビティとして利用。

●地域住民

⇒大雪山を訪れる旅行者との交流の場としての利用や、地域の魅力を再発見する場。

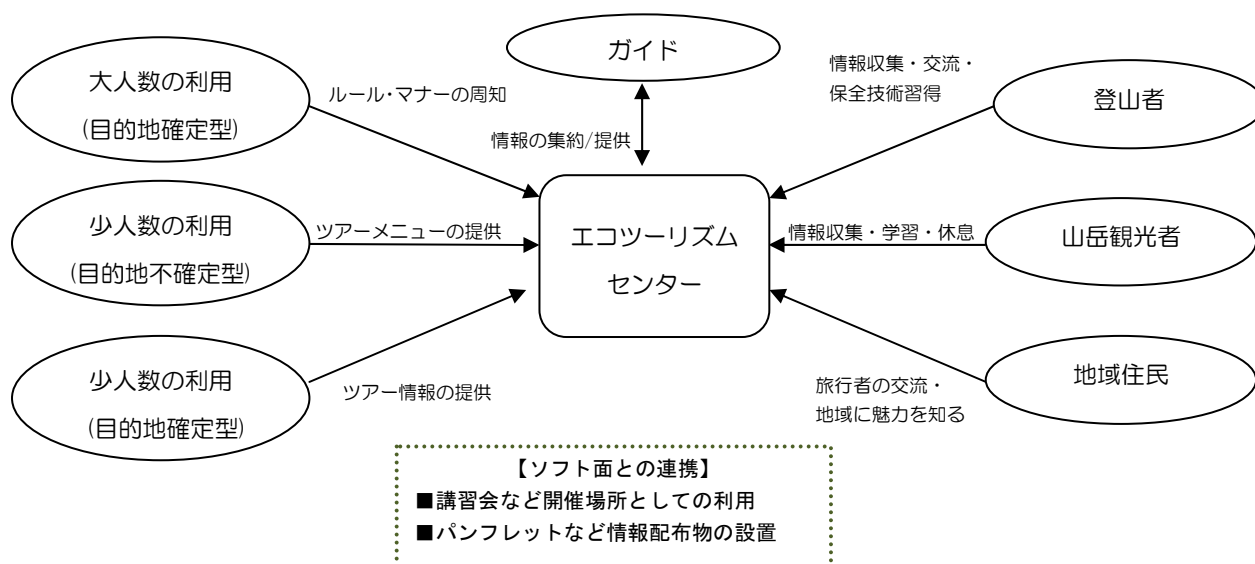


図 4-4-1 利用者層ごとのエコツーリズムセンター利用のイメージ

(5) 施設構成

エコツーリズムセンターが担う機能を踏まえ、整備が必要となる施設内容と各施設の役割・機能を以下のとおりとした。

表 4-4-3 施設内容と各機能

施設内容	役割・機能
①情報案内エントランス	利用者にエコツーリズムやエコツアーの企画などの情報提供を行う。またアイヌや東川町の歴史や文化を紹介する
②レクチャールーム	利用者への利用上のルールやマナーの指導の場、また、ガイドを中心とした登山道補修の技術講習会や保全活動に興味を持つ利用者の交流、会議など行うことができる機能
③スタッフルーム	スタッフの日常の執務室。打合せスペースや給湯施設など
④トイレ	利用者及び事務所関係者のための施設
⑤資材置場	保全活動などに使用する器具の保管場所
⑥風除室	外気の流入や風による雪や雨の侵入を防ぐ
⑦機械室	空調施設や電気設備などの部屋

(6) 施設規模

(4) 施設構成に基づいて、各施設の概略規模を以下のように設定した。施設規模の算定に当たっては、「自然公園等施設整備技術指針」（環境省自然保護局監修）における算定方法や基準となる施設規模などを参考とし、当該施設の機能特性を考慮したうえで行った。

①情報案内エントランス

エコツーリズムセンターの情報案内エントランス（展示室）の規模は、展示室の最大時利用者数に利用者 1 人当たり 4.0～5.0 m²の単位規模を乗じて算出を行った。

ここでの最大時利用者数はガイドツアーでの最大参加人数である 20 人を設定する。また単位規模は下限値の 4.0 m²/人と設定する。

以上の考えに基づき、情報案内エントランスの必要面積は 80 m²と設定する。

- ・最大時利用者人数：20 名（ガイドツアー最大参加人数）
- ・利用者 1 人当たりに必要となる単位規模：4.0 m²/人
- ・情報案内エントランス：最大時利用者数×単位規模＝20 人×4.0 m²/人＝80 m²

②レクチャールーム

レクチャールームの規模は、レクチャールームの最大時利用者数に利用者 1 人当たり 1.5～2.0 m²の単位規模を乗じて算出を行った。

ここでの最大時利用者数は学びの場としての利用を想定し、小中学校の 1 クラスの人数 40 人を設定する。また単位規模は下限値の 1.5 m²/人と設定する。

以上の考えに基づき、情報案内エントランスの必要面積は 60 m²と設定する。

- ・最大時利用者人数：40名（小中学校1クラス人数）
- ・利用者1人当たりが必要となる単位規模：1.5㎡/人
- ・レクチャールーム：最大時利用者数×単位規模＝40人×1.5㎡/人＝60㎡

③スタッフルーム（事務室及び応接室）

「国立公園管理事務所等面積算定・設備基準」によるスタッフルーム（事務室）の単位規模は、1人当たり4.0㎡とし、これに換算人員及び換算人員換算率（下表）を乗じて算定し、湯沸室5.0㎡等の付属面積を加えて求めることとしている。

換算人員換算率

区分	所長	課長	主査級	一般職
換算率	10	2.5	1.8	1

施設のスタッフ人数を所長1人及び職員2人と設定し、換算率区分は所長1人及び主査級2人とする。

以上の考えに基づき、スタッフルームの必要面積は59.4㎡と設定する。

$$\text{スタッフルーム} = (4.0 \text{ m}^2 \times 10) + (4.0 \text{ m}^2 \times 1.8) \times 2 + 5.0 \text{ m}^2 = 59.4 \text{ m}^2$$

④トイレ

「自然公園等施設整備技術指針」を参考に、男女別に配置するとして20㎡と設定する。

⑤資材置場

「自然公園等施設整備技術指針」を参考とし20㎡と設定する。

⑥風除室

風除機能の他に玄関機能を備えることとして6㎡と設定する。

⑦機械室

上記①～⑥の床面積の2%として、4.9㎡と設定する

⑧エコツーリズムセンター規模

以上の検討結果から、新設エコツーリズムセンターの概略総規模は250㎡を計画する。

エコツーリズムセンター施設規模

$$80 \text{ m}^2 + 60 \text{ m}^2 + 59.4 \text{ m}^2 + 20 \text{ m}^2 + 20 \text{ m}^2 + 6 \text{ m}^2 + 4.9 \text{ m}^2 \doteq 250 \text{ m}^2$$

(7) 施設位置（整備箇所）の検討

新設エコツーリズムセンターの施設位置については、旭岳ロープウェイ周辺の4箇所をベースにして、検討条件に保安林及び支障物件の有無を追加して検討を行った。4案の特徴及び比較表を以下に示す。

表 4-4-4 エコツーリズムセンター設置位置案

①案：旭岳ロープウェイ山麓駅舎隣接（手前側）	旭岳ロープウェイ山麓駅舎に隣接し、かつ旭岳ロープウェイ山麓駅駐車場にも隣接した案
②旭岳公共駐車場隣接	利用者が優先的に駐車すると考えられる無料の旭岳公共駐車場に隣接した案
③案：旭岳ロープウェイ山麓駅舎隣接（奥側）	旭岳ロープウェイ山麓駅舎に隣接し、かつ旭岳ロープウェイ山麓駅舎の出入口に近接した案
④ピクニック広場手前	旭岳ロープウェイ山麓駅駐車場の東側に隣接し、ピクニック広場前とした案

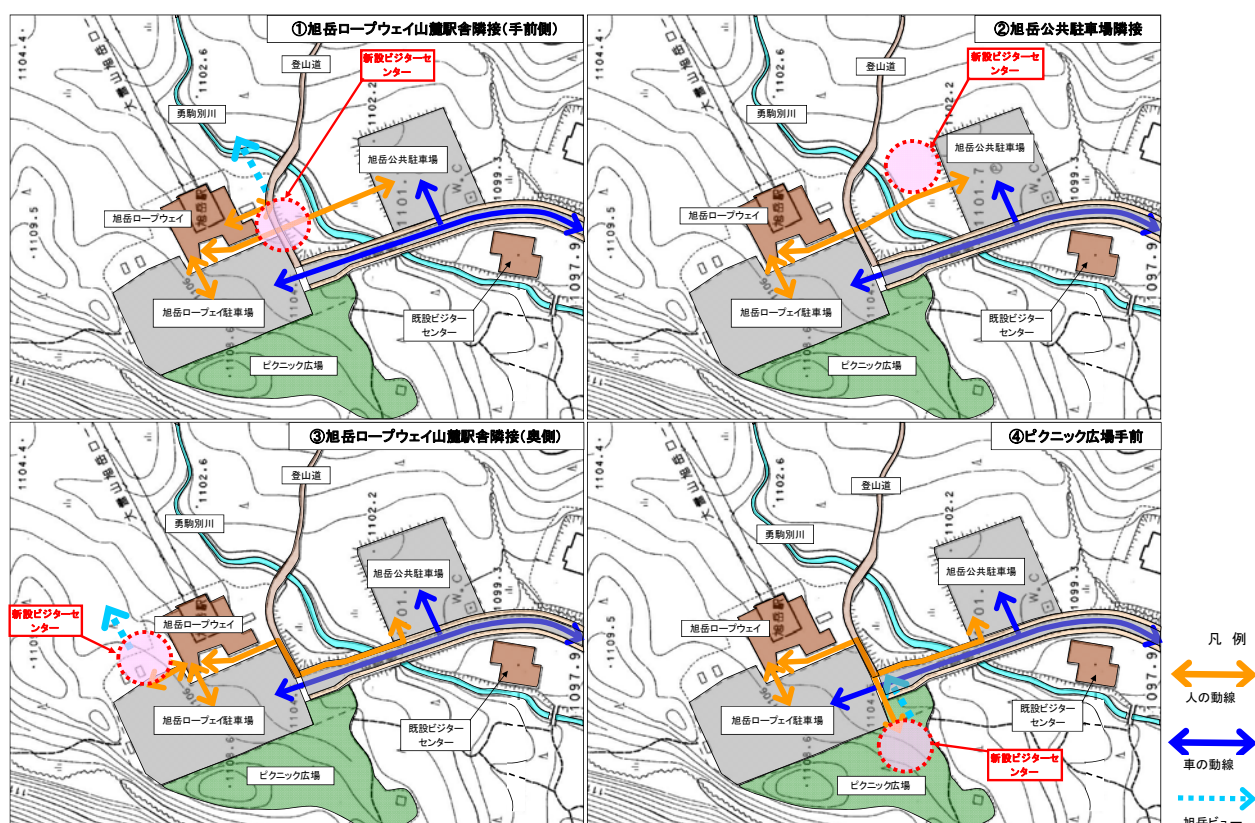


図 4-4-2 新設エコツーリズムセンター設置候補位置

表 4-4-5 施設位置の比較表

	①：旭岳ロープウェイ山麓駅舎隣接（手前側）	②：旭岳公共駐車場横隣接	③：旭岳ロープウェイ山麓駅舎隣接（奥側）	④：ピクニック広場手前
機能性	登山道利用者も含めた全利用者が立ち寄りやすい	旭岳公共駐車場利用者は立ち寄りやすく、旭岳ロープウェイ駐車場利用者は立ち寄りづらい	登山道利用者以外は立ち寄りやすい	旭岳ロープウェイ駐車場、旭岳公共駐車場とも利用者動線から離れるため立ち寄りづらい
景観性	旭岳・湿地・勇駒別川の眺望が可能	樹林に囲まれた閉鎖的な景観	旭岳・湿地の眺望が可能	旭岳の眺望が可能
環境負荷	既造成地のため負荷が少ない	樹林地を造成するため負荷が最も大きい	湿地の一部を造成するため負荷が大きい	高低差がある樹林地の造成のため負荷が大きい。
保安林の解除※	不要	要	不要	要
支障物件の有無	登山道 スキーコース	木道	除雪車、倉庫	—
経済性	木橋整備による事業費の増加	木橋整備による事業費の増加	—	—
その他	—	—	公道との接する用地を確保することが困難である。	—

※保安林解除の有無については、施設位置の最終決定の段階で再度詳細に確認すること。

※用地については全て道有林であるため貸付となる。

「①案」は旭岳ロープウェイ及び登山道利用者が共に立ち寄りやすく、旭岳・湿地・勇駒別川の眺望にも優れている。また、規制造成地のために自然環境に対する改変も少なく、施設整備に伴う環境負荷が少ない。保安林の解除区域内であると想定されることから、新たな保安林解除の申請は不要と思われる。支障物件については旭岳へ登山道及び冬にスキーコースのゴール地点となっていることから、施設整備の際は配慮が必要となる。

なお、旭岳公共駐車場から利用者のアクセス性をより円滑にするためには、新設エコツアーセンターと旭岳公営駐車場とを短絡的に連絡するルートとして、勇駒別川を横断する歩行者専用の橋（木橋を想定）を整備することが必要となるが、その場合は事業費の増加となる。

「②案」は旭岳公共駐車場からの利用者にとっては立ち寄りやすいが、旭岳ロープウェイ山麓駅駐車場から旭岳ロープウェイや登山道を利用する場合の利用者動線とは逆方向に新設エコツーリズムセンターが立地するため、旭岳ロープウェイ山麓駅駐車場からの利用者には非常に立ち寄りづらい。そのため、本案では旭岳ロープウェイ山麓駅駐車場からの利用者のアクセス性を高めるために、新設エコツーリズムセンターと旭岳ロープウェイ山麓駅駐車場を短絡的に連絡するルートとして、勇駒別川を横断する歩行者専用の橋（木橋を想定）を整備することが不可欠であり、その分の事業費の増加となる。また、既存地の樹林地を造成するため、施設整備に伴う環境負荷が大きい。また、保安林の区域内であると想定されることから、新たな保安林解除の申請は必要になると思われる。支障物件については平成 19 年度の検討当時には整備されていなかった湿原を巡る木道が整備されており、新規エコツーリズムセンターの整備は難しいと思われる。

「③案」は登山道利用者は立ち寄りにくいが、旭岳ロープウェイ利用者は立ち寄りやすく、旭岳・湿地の眺望にも優れている。既存の湿地の一部を造成する可能性があるため、その場合、施設整備に伴う環境負荷が大きい。また、道道勇駒別線道路（車道）（道道旭川旭岳温泉線）から新設エコツーリズムセンターまでは旭岳ロープウェイ駐車場が整備されているため、公道への接続が困難である。保安林の解除区域内であると想定されることから、新たな保安林解除の申請は不要と思われる。支障物件については、除雪車と倉庫があり、また除雪した際の雪捨て場となっていることから、施設整備に当たってはこれらについても検討を行う必要がある。

「④案」は、旭岳ロープウェイ駐車場と旭岳公共駐車場からの旭岳ロープウェイや登山道に向かう利用者動線から離れるため、利用者にとっては利用しづらいが、旭岳の眺望に優れている。また、高低差のある樹林地の造成のため、施設整備に伴う環境負荷が大きい。一部保安林の区域内にかかることが想定されることから、新たな保安林解除の申請が必要と思われる。支障物件については特にない。

以上、①～④案までの特徴及び与条件を整理した。②案については現在既に木道が整備されており、当該箇所への整備は不可能と考えられる。④についても利用者の動線から離れることから、整備箇所候補としての優先度は低いと考えられる。

①案と③案では、①案が利用者アクセス性の向上を考慮して木橋整備を行う場合に事業の増加が予想される一方、③は旭岳ロープウェイ駅に正面入口に近接していることから利用者が立ち寄りやすい。また、比較的施設規模が小規模なことから、現行の保安林解除区域内での整備が可能と思われること、また、支障物及び湿地への影響も無いか、もしくは最小限度に抑えることが可能と考えられる。

以上のことから、現時点では③案を最有力候補とし、今後、最終的な整備箇所の調査・検討を行い、旭岳ロープウェイや旭岳公共駐車場などの関係者間での調整を行った上で決定することとする。また保安林解除の有無については、最終的な施設規模及び設置位置を決める際に、再度、森林管理局への解除範囲などの確認が必要である。

(8) 新設エコツアーリズムセンターの施設の配置

図 4-4-3 に新設エコツアーリズムセンターの施設の配置案を示す。

エントランスは旭岳ロープウェイにできるだけ近接する場所に設け、ロープウェイ利用者の入館を促す。また情報案内エントランスはレクチャールームで、パーティションで仕切るようにし、大人数の利用でも対応できるようにする。

また裏口を設置し資材倉庫と隣接させることにより、館内を通過すること無く効率良く資材の搬入出が可能となるようにした。これにより、資材の搬入出により館内が汚れることも極力防止できる。

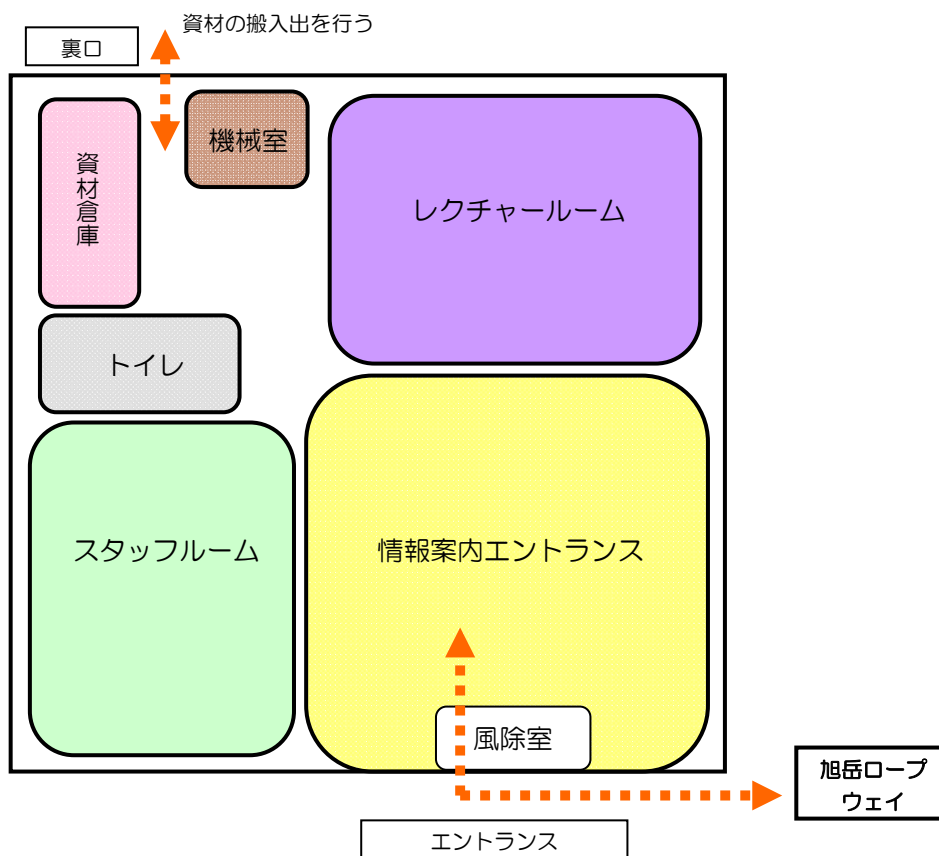


図 4-4-3 新設エコツアーリズムセンターの施設配置 (案)

(9) 拠点施設の運営体制

新設するエコツーリズムセンターの管理運営体制計画を以下に示す。

1) 運営体制

エコツーリズムセンターの機能を最大限に発揮させるためには「人」を配置することが重要となる。通常エコツアーを展開していく場合には、エコツアーの情報（資源情報含む）の収集や提供、独自プログラムの企画や実施、地域社会との交流や事務作業など多岐にわたることから1名体制ではなく2名以上の体制で管理運営を進めていくことが望ましい。

現時点では、上記の「人」に関する運営体制については、地元東川町で行うことを想定している（管理責任者1名：東川町職員を想定・非常駐 2名の職員：常駐）が、将来的には、利用者からの協力金やエコツアープログラムからの収益や関連事業者からの負担金等により独立採算での運営を視野に入れるものとする。

なお、施設の基本的な維持管理費（清掃費、光熱水費等）については環境省で負担をすることを想定している。

2) 管理運営上の業務

新設エコツーリズムセンターの業務としては、以下の項目が想定される。

- エコツーリズム、エコツアーに関する情報提供や利用案内
- エコツアーの企画と実施
- エコツーリズムに関わる情報の一元化と発信
- エコツーリズム推進の事務局

3) 施設の維持管理費（ランニングコスト）

運営体制でも記載したとおり、人員配置については短期的には町、将来的には独立採算での運営を視野にいれていることから、ここでは施設の基本的な維持管理費に関する検討を行う。新設エコツーリズムセンターの維持管理費の算定は、管内の中規模直轄施設の維持管理費の実態を調査し、単位面積当たりの維持管理費の算出を行った。

表 4-4-6 北海道地方環境事務所管内の直轄施設（中規模）の維持管理費

施設名	延床面積 (㎡)	光熱水費 (円)	清掃費等 (円)	合計 (円)	単位面積当たり費用 (円/㎡)
サロベツ湿原センター	696	1,600,000	5,900,000	7,500,000	10,700
層雲峡ビジターセンター	716	2,300,000	4,350,000	6,650,000	9,200
支笏湖ビジターセンター	997	4,200,000	4,300,000	8,500,000	8,500
財田自然体験ハウス	663	2,000,000	4,557,000	6,557,000	9,800
				平均	9,550

※サロベツ湿原センターは、清掃対象がトイレのみであることから換算値を記載

表 4-4-6 より、単位面積あたりの維持管理費用は 9,550 円/㎡となった。よって今回計画しているエコツーリズムセンターの維持管理費用は以下のとおり算定される。

$$9,550 \text{ 円/㎡} \times 250 \text{ ㎡} = 2,387,500 \text{ 円} \approx 2,400,000 \text{ 円}$$

※上記算定については個別の設備（消防用設備、浄化槽、自家用電気工作物等）の保守点検費用は含まれていないため、設計段階でさらに詳細に維持管理費用を算出する必要がある。

4) 地元関係者等との役割

エコツーリズムセンターの運営（実施事業）をより効果的なものにしていくためには、東川エコツーリズム推進協議会の意向を十分に反映する必要がある。そのため、施設運営に関する方針等を決定するための組織を推進協議会の内部（あるいは下部）に設置するとともに、施設の管理運営に関する地元事業者、地元関係者、行政の役割を明確にしていくことが重要となる。

●事業者の役割

利用者・地元関係者への情報提供や地元関係者間の調整など、エコツーリズム推進の中心的役割を担う。

●地元関係者の役割

事業者や行政との連携を密にして、エコツーリズムの推進に寄与する。

●行政の役割

事業者が進める取り組みに対して、支援、指導、調整を行う。

4-5 推進体制

エコツーリズムの推進にあたっては、関係者が話し合う場づくりや、情報や広報の一元化が必要となる。そのために地元コアメンバーからなる事務局が中心となり、エコツーリズム推進協議会を設立することとする。

協議会の構成メンバーは、ガイド事業者、温泉組合、交通機関、旭岳ロープウェイ、地元産業、旅行会社、その他関連機関とする。また、関心がある人は誰でも参加できるような仕組みとする。

協議会は、情報の受発信の一元化やエコツアーのプログラムの企画のほか、会合を開いて構成メンバー間の情報交換や、エコツアー実施に向けた調整等を行う。

また、将来的には他地域におけるエコツーリズムの取組みとの連携も視野にいれることとする。

4-6 中期計画（実施スケジュール）

新設エコツーリズムセンター及びソフト面での取組みの中期計画（実施スケジュール）を以下に示す。新設エコツーリズムセンターは平成26年度からの供用開始を見込み、並行して平成24年度よりエコツーリズム推進協議会の設立準備を行い、平成25年から運営を開始し、平成26年度のエコツーリズムセンター供用開始に向けて、エコツーリズム推進に向けた関係者間での調整などを実施する。その他事業についても、適宜実施していくこととする。

表 4-6-1 中期計画表

区分	項目	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
エコツーリズムセンター	候補地決定		↔				
	測量調査		↔↔				
	地質調査		↔↔				
	基本設計		↔↔				
	実施設計			↔↔			
	施工				↔↔	供用開始	
	用地調整		↔↔				
登山道 保全修復	測量調査		↔↔				
	基本・実施設計			↔↔			
	施工				↔↔	供用開始	
トイレ改修 園地再整備	基本・実施設計	↔↔					
	施工		↔↔	供用開始			
ソフト整備	協議会設立準備		↔↔				
	協議会立上げ			↔↔	運営開始		
	登山道標識の統一化		↔↔↔↔				
	トイレの仕組み検討		↔↔↔↔				
	登山道荒廃の経過観察		← - - -	- - - -	- - - -	- - - -	- - - -
	エコツーリズムのルール に対する支援		← - - -	- - - -	- - - -	- - - -	- - - -
	モニターツアーの実施		← - - -	- - - -	- - - -	- - - -	- - - -
	保全講習会などの実施		← - - -	- - - -	- - - -	- - - -	- - - -